

古代文学の中の都市イメージの継承 ホラティウスとイソップ寓話の場合

宮 城 徳 也

序 セネカ『狂えるヘルクレス』における都市と田園

古代の文学作品で、「都市」はどのように描かれ、どのようなイメージを持たれていたであろうか。叙事詩において、都市は概ね繁栄の象徴であり、富と権力の集積地で、そこに芸術も生まれ、文化が栄えていたと言う描写がなされている。一方、都市に対する否定的なイメージとして、叙事詩の場合でも、疫病の流行、権力闘争、敗戦による落城などが考えられる。疫病の蔓延と人びとの死に関しては、叙事詩のみならず悲劇やラテン詩においても精緻な描写がなされていることは以前論じた⁽¹⁾。疫病、落城以外の都市に対する否定的なイメージとして、権力闘争との関係は保持しているようには思われるが、セネカの悲劇『狂えるヘルクレス』の第一合唱隊歌の次の箇所は印象深い⁽²⁾。ユノーの独白による長いプロロゴスの後、入場した合唱隊が、夜明けを美しく歌い上げながら、日の出とともに始まる「辛い労働」(labor durus) に話題を向け、羊飼いと漁師の仕事に焦点をあてる。しかし、こうした日々の労働に従事する庶民たちには「僅かな蓄え」しかないとしても、「罪無き生活」(innocua vita)、「静かな安らぎ」(tranquilla quies)、「楽しい家庭」(laeta domus) があると断じて、さらに、

spes immanes urbibus errant

trepidique metus.

ille superbos aditus regum

durasque fores expers somni 165

colit; hic nullo fine beatas

componit opes,

gazis inhians

et congesto pauper in auro;

illum populi favor attonitum

fluctuque magis mobile vulgus 170

aura tumidum tollit inani;

hic clamosi rabiosa fori

iurgia vendens

improbis iras et verba locat.

(諸都市には無限の野望と身も凍る恐怖がさ迷っている。眠りを犠牲にしても、王たちの傲慢な門扉と非情な戸口に伺候する者もあり、際限もなく豊かな富を積み上げては、財宝をなお貪欲に求めながら、蓄えた黄金の中でも満ち足りない者もいる。民衆の人气が誰かを驕り高ぶらせ、波よりも激しく移り変わる群集が、空しい評判で持ち上げるかと思えば、喧しい法廷の狂気に満ちた論争を売り物として、悪辣にも怒りの言葉を投げ付ける者もいる。) (セネカ『狂えるヘルクレス』162-174行)

として、都市に見られる、有力者のご機嫌を伺う下層民、際限の無い欲望を断ち切ることのできない守銭奴、民衆を扇動して不安定な権力を得ようとする政治家、他人の不幸で商売する法廷弁論家を例に挙げて、ギリシア悲劇の翻案作品でありながら、「諸都市」と言っているのは、帝政初期の大都市ローマに見られる負の要素をあげつらっている。「王たち」と言っているのは、ローマ元老院を訪ねた外国使節が、議員たちに「諸王の集まり」と呼び掛けた先例⁽³⁾があり、ローマの有力たちの言い換えであろう。

さらに合唱隊は、運の変転のはかなさを語った上で、

Alium multis Gloria terris

tradat et omnes

Fama per urbes garrula laudet,

caeloque parem tollat et astris; 195

alius curru sublimis eat:

me mea tellus

lare secreto tutoque tegat.

venit ad pigros cana senectus,

humilique loco sed certa sedet

sordida parvae fortuna domus; 200

alte virtus animosa cadit.

(「栄光」が全世界に委ね、喧しい「名声」が都市と言う都市において称賛して、天の星々にも等しい存在とする者もいるだろうし、馬が牽く戦車で意気揚々と行進する者もいるだろう。だが、私を私の土地が、人知れず安全な家にいさせてくれますように。白髪の老年が目立たず生きた者たちに訪れる。つつましいけれども確かな場所に、小さな家のささやかな幸運は確かに存在する。

一方、野心に満ちた功業は高みから失墜するものなのだ。) (セネカ『狂えるヘルクレス』192-201行)

と結論づけている。ここに見られるのは、栄光と名声に満ち、都市で称揚される成功のはかなさと対比されている田舎家でのつつましいが安定した生涯への希求であろう。実人生において、属州からローマに出て、栄光と名声を得た上で、富と権力の絶頂を極めながら、皇帝ネロとの確執によって自死による終わりを迎えたセネカ作と伝えられる悲劇の基層部分を為す思想の中に、都市への否定的ヴィジョンがあったことは皮肉にも思えるし、あくまでも作家としての創作上の姿勢に過ぎなかったかも知れないが、古代における都市に対する否定的なイメージを過不足なく表現していると言って良いだろう⁽⁴⁾。

一. ウェルギリウスの場合 叙事詩とその他の作品

これと対照的に、セネカの先人であるウェルギリウスが叙事詩『アエネイス』に描いている都城カルタゴの建設途中の様子は、発展を期待される都市の様子が生き生きと語られている。

『アエネイス』第一巻でシチリアからイタリアに向かう途中アエネアス一行は嵐に遭い、北アフリカの岸辺に漂着し、若い女性狩人に身をやつした母である女神ウェヌスの導きで、建設中の新都カルタゴの女王デイドーを訪ねることになる。腹心の部下アカテスを伴って、新都の城塞を見下ろす丘に登った。そこから見える都市を構成する要素は、城門 (portae)、舗装路 (strata viarum)、城壁 (muri)、家屋 (tectum)、それを囲む溝 (sulcus)、港 (portus)、劇場 (theatrum)、である。「法を制定し、行政官を選任し、神聖な元老院を設置している」(iura magistratusque legunt sanctumque senatum.) という句が写本通り、この箇所が真正な位置であれば⁽⁵⁾、役所や議事堂も言及されていると思われる。

この都市描写のハイライトは、城市の中の森と神殿の描写であろう。北アフリカの海岸に到達したフェニキア人たちが、女神ユノーの予兆を得て、数世紀にわたる繁栄を約束された場所にデイドーは女神に捧げる神殿を建設した。その神殿を前にしたアエネアスは、そこに施された、主としてトロイア戦争の諸場面を描いた、工匠による装飾芸術に目を見張りながら女王の到着を待った。三七行に及ぶ長い「描写」の後、女王デイドーが威厳に満ちた姿で現われるが、その様子を女神ディアナに喩えつつ、

talis erat Dido, talem se laeta ferebat
per medios, instans operi regnisque futuris.
tum foribus divae, media testudine templi, 505
saepa armis solioque alte subnixa resedit.

iura dabat legesque viris, operumque laborem
partibus aequabat iustis aut sorte trahebat:

(ディドーの姿はさながら女神のようであったが、人々の中をそのような姿で晴れやかに歩み、将来の王国に関する仕事に取り掛かった。女神の館の扉が開き、破風のある神殿の中央で、武器に囲まれ、玉座の高みに着座した。掟と法を人々に定め、公平な職務分担を決めたが、くじ引きによる場合もあった。) (『アエネイス』 第一巻503-508)

と締めくくり、繁栄を実現していく都市の創建者として威厳に満ちた女王に立法者としての役割も果たさせている。

『アエネイス』における都市描写に関しては、ホメロスを踏襲しながら、その繁栄にフォーカスして、都市に対する肯定的イメージに満ちている。『イリアス』でヘクトルがトロイア滅亡の予感を語った⁽⁵⁾ように、カルタゴが繁栄の後、ローマに滅ぼされることを作者も読者も知っている⁽⁶⁾ので、単純な称賛とは言い切れないが、叙事詩の伝統を引き継いだ表現がなされていると言えよう。

では、詩人としてのウェルギリウスには都市に対する否定的なヴィジョンは無いのであろうか。『農耕詩』の次の箇所には、注目すべきだろう。

fortunatus et ille, deos qui novit agrestis,
Panaque Silvanumque senem Nymphasque sorores.
illum non populi fascēs, non purpura regum 495
flexit et infidos agitans discordia fratres,
aut coniurato descendens Dacus ab Histro,
non res Romanae perituraque regna; neque ille
aut doluit miserans inopem aut invidit habenti.
quos rami fructus, quos ipsa volentia rura 500
sponte tulere sua, carpsit, nec ferrea iura
insanumque forum aut populi tabularia vidit.

(幸運なるかな、田野の神々を、牧神パンを、老いたるシルヴァヌスを、ニンフたち姉妹を知る者もまた。人民が託す権標も、王たちが着る紫衣も、その人の心を動かすことはない。兄弟同士の不信を煽る不和も、陰謀を図るヒステル川から攻め降りて来るダキア人も、ローマの国家も、いつかは滅びる諸王国も、だ。その人は貧者たちを憐れんで嘆くこともなければ、富者を妬むこともない。枝が実らせる果実を、田園が自らの意志で強いられることもなく産み出した実りを積み集めて、苛烈な法律、狂騒の広場、国民の公文書庫を目にすることも無い。) (『農耕詩』 第二

卷493-502行)

ここに歌われているのは、「田園が自らの意志で」(rura sponte sua)に集約されるように「黄金時代」のイメージ⁽⁷⁾であり、到底実現することない世界である。一方で、都市を支える、国法、裁判が行われる広場、戸籍や法文を取める公文書庫への、内乱、外征と並んで、人類に不幸を齎す否定的な言及は、人間の幸福に重点を置く視点からは都市に対して、田園が優位にあることを間違いなく語っているであろう。一方、この箇所直前では、

Felix, qui potuit rerum cognoscere causas,
atque metus omnis et inexorabile fatum
subiecit pedibus strepitumque Acherontis avari.

(幸いなるかな、森羅万象の因果を熟知することができ、全ての恐怖、不動の運命、貪欲な冥界の河アケロンのざわめく音を足下に踏みしだいた者は。) (『農耕詩』第二卷491-493行)

と語っており、エピクロス思想を学んで事物の諸性質 (rerum causas) を探求し、死の恐怖を克服したとされる哲学詩人ルクレティウスを想起させる⁽⁸⁾が、死を乗り越える智を獲得した哲学者一般とも考えられるよう。「幸いなるかな」(felix)と「幸運なるかな」(fortunatus)の使い分けからも察せられるように、運の転変に左右される庶民よりも、真の幸福を獲得すると想像される。しかし、それは誰にでも可能なことではない。次善であり、実現には幸運が必要だとしても、田園で自然の實りに恵まれて暮らす幸せを称揚しているものと思われる。

宇宙の真理を体得する哲学者には及ばなくても、

Sin, has ne possim naturae accedere partis,
frigidus obstiterit circum praecordia sanguis:
rura mihi et rigui placeant in vallibus amnes, 485
flumina amem silvasque inglorius.

(もし、心肺の周りにある冷たい血液に妨げられて、このような自然の領域に近づき得ないとしても、田野と渓谷で水が豊かな流れが私には喜ばしく、川と森を名も無き者として私は愛するだろう。) (『農耕詩』第二卷483-486行)

と、「私」が「名も無き者」(inglorius)として田園の生活を選ぶことを宣言している。「名も無き」という形容詞は「栄光」(gloria)を否定するもので、その場合の栄光は、

O fortunatos nimium, sua si bona norint,
agricolas! quibus ipsa procul discordibus armis
fundit humo facilem victum iustissima tellus. 460

(ああ、もし自分が持つ良きものを知っているならば、何と幸運な農民たちだろうか。彼らのために、相争う武具から離れた、この上なく正義に叶う大地が、生きるための糧を産み出すのだ。)
〔『農耕詩』第二巻458-460行〕

で言及される武具 (arma) に拠るもので、それによって得られるのは、「驕り高ぶる門構えの聳え立つ館」(foribus domus alta superbis) であり、「毎朝ご機嫌を伺いに来る者たちの波」(mane salutantum undam) であり、贅沢な装飾、衣裳、食事への言及もある。戦勝による「栄光」が都市における奢侈に直結し、取り巻きの多さが権力の保証につながる一方、贅沢な食事や宴会は健康を損ね、取り巻きの伺候と彼らへの配慮は煩わしさを齎す。

詩想においても、措辞においても『農耕詩』第二巻のこの箇所はセネカ『狂えるヘルクレス』の第一合唱隊歌と共通していると言えよう⁽⁹⁾。

『農耕詩』の随所に都市生活の否定的側面と対照される、田園生活への憧憬と称賛が散見される。一方で、ローマの「栄光」そのものを詩人は否定していない⁽¹⁰⁾。『農耕詩』第二巻は冒頭から「果樹」の美しさと効能を歌い上げた (8-135) 後、「イタリア讃歌」と通称される箇所 (136-176) に至る。そこでは果樹、動植物、鉱物ばかりでなく、国土の卓越性も歌い上げられ、そこに偉大な都市ローマを含む諸都市があつて、勇壮な諸部族、英雄たちが輩出したことを称揚して最後にオクタウィアヌス・カエサルの名を挙げ、彼が世界中で勝利を置収めていることに言及して、

Ascraeumque cano Romana per oppida carmen.

(アスクラの詩人の歌を私は、ローマ支配下の町々で歌う。)(『農耕詩』第二巻176行)

と宣言している。アスクラの詩人は前八世紀のヘシオドスを、その歌とは農事暦と農耕技術、正義の価値と勤労の美德を歌い上げた『労働と日々』であることは異論が無いだろう。彼は

ἐξ ἔργων δ' ἄνδρες πολὺμηλοὶ τ' ἀφνειοὶ τε:
καὶ ἐργαζόμενοι πολὺ φίλτεροι ἀθανάτοισιν.
ἔργον δ' οὐδὲν ὄνειδος, ἀεργίη δέ τ' ὄνειδος.
εἰ δέ κε ἐργάζῃ, τάχα σε ζηλώσει ἀεργὸς
πλουτεῦντα· πλοῦτῳ δ' ἀρετὴ καὶ κῦδος ὅπηδεῖ.

(仕事によって、人々は家畜に恵まれ、豊かにもなる。仕事にいそしむ者たちは、神々に一層愛

されるのだ。仕事は不名誉ではなく、怠惰が不名誉なのだ。お前が仕事をすれば、働かない者が豊かになっていくお前を羨むことになる。富には名声と栄誉が伴うからだ。)(『労働と日々』308-313)

「名声と栄誉」と訳した ἀρετή と κῦδος は多義的で、前者は個人の武勇や道徳における卓越性を意味し、後者はラテン語なら gloria にあたる「栄光」を意味しうる。従って、単純な比較で即断することはできないが、ヘラクレス神話なら苦難を経て栄光にいたるモチーフの農民版とも解しうる。しかし、ここでは一農民に過ぎない詩人が相続をめぐる不仲の弟にひとの取り分を横取りするより、労働に勤しめと言う教訓を語っている箇所なので、「農業労働による富の獲得と、それに伴う評判」くらいの意味と考えられる。

それに対して、ウェルギリウスはそのような勸農精神の歌を、ポイオティアの一寒村ではなく、「ローマ支配下の町々」で歌うと宣言しているのであるから、ヘシオドスに範を仰ぎながらも、そのスケール観は遥かに大きなものと言えよう。

Romanos ad templa deum duxere triumphos.

(ローマの凱旅行進を神々の館へと導いた。)(『農耕詩』第二巻148)

主語は「イタリア讃歌」で讃えられたイタリアの国土が産み出す生贄の牡牛を含む群である⁽¹¹⁾が、農業を支える国土を讃えながら、詩人の念頭には、ローマが戦争を通じて産み出した「栄光」があったことは間違いがないだろう。

『農耕詩』第二巻の最後(458-542)は「農耕賛歌」と通称され⁽¹²⁾、ヘシオドスの精神を受け継ぐ、全篇の中でも最も重要な箇所であるが、そこでは、危険を冒して海を渡り、王宮、都城を攻め落として掠奪し、ため込んだ財産に固執し、政治や法廷の弁論への称賛を求め、兄弟を殺し、家族と分かれて亡命と身となり、異国の地に赴く者たちもいる(503-510)一方で、

Agricola incurvo terram dimovit aratro:

hinc anni labor, hinc patriam parvosque nepotes

sustinet, hinc armenta boum meritosque iuencos. 515

(農民は曲がった鋤で大地を耕すが、これによってその年の労働が、祖国と子供たちを、仔牛の群を、大事な若牛どもを養うのだ。)(『農耕詩』第二巻512-515行)

とし、農民にとっては「労働」(labor)こそが全ての基盤であると断じている。この点ではやはりヘシオドスを継承しており、第一巻の

tum variae venere artes. labor omnia vicit 145

inprobus et duris urgens in rebus egestas.

(その時、さまざまな技術が生まれた。労苦が、すなわち困難な状況の中での辛い欠乏が全てを征服したのだ。)『農耕詩』第一巻145-146)

と言う断言に通じている。「労働」と「労苦」と訳し分けたが、いずれも labor という語であり、第一巻では狩猟と採集の労苦を通して、農業技術が生まれたことを語っており、『農耕詩』を支える基本概念であることが分かる。

その上で、こうした労働が支えるものの中に「祖国」(patria) が言及されており、勤勉な農民の労働が国家の支柱であるとする思想が垣間見える。勇猛なサビニー族、ロムルス、レムス兄弟が生まれ、エトルリア人の支配を経て、

rerum facta est pulcherrima Roma,

septemque una sibi muro circumdedit arces. 535

(ローマは世界で最も見事な都市となり、七つの丘を一つの城壁で囲んだのだ。)

と都市ローマの繁栄へと集約していく。『農耕詩』においては、農民の労働こそが国家を支える基盤であり、サトゥルヌスが支配した黄金時代が去っている以上、イタリアの豊かな国土は農民の勤儉努力があってこそ豊穡な土地となり、黄金時代の再来にもたとえられる「ローマの平和」も、農民国家として発展したローマを最終的に支配するオクタウィアヌス・カエサルの勝利と統治があって実現したもので、哲学者が夢想する喧騒と権力闘争の渦巻く都市と無縁の田園の幸福は憧憬の対象ではあっても、実現可能なものとは思われていなかったことは明白だろう。

『農耕詩』第三巻で詩人は、

Primus ego in patriam mecum, modo vita supersit, 10

Aonio rediens deducam vertice Musas;

primus Idumaeas referam tibi, Mantua, palmas,

et viridi in campo templum de marmore ponam

propter aquam. Tardis ingens ubi flexibus errat

Mincius et tenera praetexit arundine ripas. 15

(命永らえることができるなら、まず私は我が祖国へと帰って、アオニア山塊の頂から詩神を勧請したい。マントゥアよ、あなたに私は最初にイドゥマエアの棕櫚を持ち帰り、川のほとりの緑あふれる野に大理石で神殿を建てつもりだ。大河ミンキウスが緩やかに蛇行し、しなやかな葦

で岸辺を縁取っているその場所に。) (『農耕詩』 第三卷10-15)

と歌った後で、その神殿の主祭神はオクタウィアヌス・カエサルであると続け、勝利者となったオクタウィアヌスのために、競技会、戦勝記念碑、戦利品、凱旋行進を歌い上げる意志を語っている (16-39行)。ここでは『農耕詩』の後に着手される叙事詩『アエネイス』への連想が広がり、「ローマの平和」が内戦、外征の勝利の結果とあることを否定しない。保護者であるマエケナスの考えに従って、それまでは森と牧場を歌い、「マエケナス無くしては、わが心は高みを求めない」(Te sine nil altum mens incohat) (42行) と言っている。英雄の栄光を歌い上げる作品に着手することを「高みを求める」とする考えは、ウェルギリウスの中にも有ったであろうと思われる⁽¹³⁾。

二. ホラティウスの場合

ウェルギリウスと同時代の詩人で、同じく保護者マエケナスを通じて、最高権力者のアウグストゥス (=オクタウィアヌス・カエサル) につながるホラティウスもまた、彼の重要な作品『諷刺詩』において、都市と田園の対比を通じて都市の持つ否定的側面を歌っている。『諷刺詩』第二卷6番は、イソップ寓話で知られる「田舎のネズミと都会のネズミ」の物語を現存する「イソップ寓話」のテキストに先立って収録していることで知られるが、最後にケルウィウスという人物が老婆から聞いた話として「田舎のネズミと都会のネズミ」の物語を引用する前に、自分の考えを開陳している⁽¹⁴⁾。

Hoc erat in votis: modus agri non ita magnus,
hortus ubi et tecto vicinus iugis aquae fons
et paulum silvae super his foret. auctius atque
Di melius fecere. bene est. nil amplius oro,
Maia nate, nisi ut propria haec mihi munera faxis. 5

(神への私の祈りはこうだった。畑の広さはそれほどではなく、そこには家の側から湧き出る泉があって、それらの上手の方にちょっとした森があれば良かった。神々はそれ以上の素晴らしいことをして下さった。十分だ。これ以上願うことはありません。マイアの子メルクリウスよ、あなたがこれらの贈物がずっと私のものであり続けるようにして下さったなら。) (『諷刺詩集』 第二卷六番1-5)

冒頭の理解には伝記的事実の知識が必要で、財産を築いた解放奴隷の子である詩人ホラティウスは紀元前46年にアテネに留学していたが、44年にユリウス・カエサルが暗殺され、ローマが内戦に突入した時、アテネにやって来た共和派のブルトゥスの軍隊に将校として加わった⁽¹⁵⁾。し

となっている。

一方、この物語は紀元後1世紀前半から半ばにかけての、現存最古の文学作品化されたパエドルスのラテン語韻文寓話集には収録されておらず、少し後の時代のバブリオスの作品集がホラティウスを除く最古の作例であり、ホラティウスはこの作品がイソップ寓話であるとは言っていないが、バブリオスは作品集第一巻の序文で、自分の作品の題材はイソップ寓話であるとはっきり語っている。

もちろん、ホラティウスの作品集には他にもイソップ寓話を連想させる詩句があり⁽¹⁸⁾、前7世紀から6世紀に実在したとされるイソップの著作は残っていないとしても、彼以前また以後の諸作品にイソップ寓話の類話があり、歴史家ヘロドトス、喜劇作家アリストパネス、哲学者プラトン、アリストテレスはイソップの名前を挙げて言及しており⁽¹⁹⁾、プラトンに拠れば、ソクラテスは死刑を待つ獄中でイソップ寓話を詩にしていたとされる⁽²⁰⁾。

ホラティウスがイソップ寓話を援用していたことは、紀元後4世紀後半の人物と思われ、イソップ寓話をエレギア詩形で集成したアウリアヌスが作品集の散文による序文で、フラックスと言う家名ではあるが、明らかにホラティウス（氏族名）が「詩の中に取り入れた」と言っている。アウリアヌスはパエドルス、バブリオスがイソップ寓話を韻文作品化したことにも言及しており、中世には作品集が失われていて、写本の再発見がパエドルスは16世紀、バブリオスは19世紀であった⁽²¹⁾ことを考えると、きわめて貴重な証言であり、ホラティウスがイソップ寓話を作品に取り入れたと古代人も一般的に理解していたと考えて良いだろう⁽²²⁾。ただし、アウリアヌスは「田舎のネズミと都会のネズミ」の話は採用していない。

またバブリオスの第二巻に収録され、第一巻からの通し番号で108番とされている話では、英訳、日本語訳その他で「田舎のネズミと町のネズミ」と言う題目が付されている⁽²³⁾。しかし、ギリシア語テキスト本文には題目が付されておらず、冒頭部分

Μυῶν ὁ μὲν τις βίον ἔχων ἀρουραῖον,
ὁ δ' ἐν ταμείοις πλουσίοισι φωλεύων,
ἔθεντο κοινὸν τὸν βίον πρὸς ἀλλήλους.

（田舎で暮らしているネズミと、食べ物でいっぱい食糧庫で暮らすネズミが、お互い暮らしを共にすることにした。）

にも田舎暮らしのネズミと対比されているのは、仮に「食糧倉庫で暮らす」と訳したネズミで、食糧倉庫（ταμείον）は都会にもあるであろうが、むしろ農園を思わせるように思われる。もちろん、同語は国庫などの金庫、小部屋を意味する場合もあり、仮に「戸棚」と訳しても、必ずしも都会の家に住んでいることを意味するとは限らないように思われる。続く

ὁ δ' οἰκόστιτος πρότερος ἦλθε δειπνήσων

ἐπὶ τῆς ἀρούρης ἄρτι χλωρὸν ἀνθούσης· 5

(まずは人家に住むネズミが畑へと食事をしに来たが、新緑の頃のことだった。)

このネズミは「家住みの」(οἰκόστιτος)とされていていて、彼は「畑へと」(ἐπὶ τῆς ἀρούρης) 食事をしにきたとあるので、「畑」(ἄρουρα)は「耕す」(ἀρώω)と同根で、単なる土地、一般的な大地を意味し得るとは言え、原義としては耕作地と考えられ、この箇所も「畑」と考えて間違いないだろう。一方冒頭に使われた「田舎の」(ἀρουραῖος)も「畑」からの派生語であるが、古い用例としてヘロドトス『歴史』(第二巻141章)において「ネズミ」(μῦς)を修飾する語として用いられているが、ここでは「生活」を修飾して「田舎の、粗野な」の意であることは間違いないだろう。一方、語源に遡り、近くに同根の「畑」が現れる以上、これを「畑に住んでいる」と考えることも可能ではないだろうか。

バブリオスの話では、家住みのネズミが田舎のネズミを誘って

ἀπήγε τὸν μῦν τὸν γεηπόνον πείσας

εἰς οἶκον ἐλθεῖν ὑπὸ τε τοῖχον ἀνθρώπου. 15

(農民であるネズミを、人間の家には壁の下を通過して入るのだと説得して連れて行った。)

とあり、通常「家の壁、囲い」(τοῖχος)が「城壁」(τειχος)を意味しうるのであれば、彼らの移動は市壁をくぐって、町中へ行くものと確信できるが、人家の中にある贅沢な食糧以外に、都市を連想させる表現は無く、少なくともバブリオスのテキストだけを見るならば、この話は畑に住む野ネズミと人家を住処とするネズミの対比で、どちらも場所は「田舎」であっても構わないように思われる。

バブリオスのテキストを校訂し、さらに現在最も権威あるイソップ寓話集成 Aesopica を編集したペリーは、通常ペリー版と称される Aesopica において、多くの話は、中世の諸写本だが、古代祖本に遡ると推定され、場合によっては紀元前3世紀のパレロンのデメトリオスの現存しないイソップ寓話集成に起源を持つとも考えられるアウクスブルク校訂本(アウグスターナ)などから、ギリシア語散文のテキストを採用しているのに、このネズミたちの話に関しては、バブリオスの韻文テキストをそのまま採用し、ギリシア語のタイトルとして「田舎のネズミと都会のネズミ」(Μῦς ἀρουραῖος καὶ μῦς ἀστικός)を付している⁽²⁴⁾。

このタイトルはペリーに先立って、イソップ寓話集の標準版テキストを校訂し、フランス語訳を付したシャンプリの本(シャンプリ版)にも付されている。このタイトルの「都会の」は「都

市」(ἄστυ)からの派生語で、「田舎の」と対比される「都会の」という意味で遅くとも前4世紀後半には使われていたので、もしもこの語をデメトリオスも使っていたのであれば、ホラティウスはもちろん、必ずしも「都会」を連想させる語を使っているとは言えないバブリオスも含めて、この物語を「田舎のネズミと都会のネズミ」の物語として伝えて行ったと言えるだろう。

しかし、シャンブリヤやペリーがタイトルに採用した「都会の」のテキスト的根拠が不明な以上、少なくともバブリオスの伝えた話に「田園と都市」の対比があるとは言い切れない。

バブリオスのテキストは、たとえ御馳走であっても、人間に怯えて暮らすのはごめんだ」と言う田舎のネズミの捨て台詞で終わっている⁽²⁵⁾。シャンブリヤ版が採用したバブリオスと少し異なるが、同趣旨の韻文テキストには、後付け教訓(epimythia)が付され、この物語の語る所は「質素に暮らして不安無く暮らす方が、恐怖に怯えながら贅沢をするよりも優っている」と言うものだとしている。この教訓も田舎との対比より、質素な安全と贅沢な恐怖の対比に重点があると言えるだろう。

ホラティウスの引用した物語も田舎のネズミの捨て台詞で終わっており、その点はバブリウスの場合と似ている。しかし、ホラティウスの場合、この物語の随所に田舎と都会の対比を盛り込んでいる。

二匹目のネズミははっきりと「都会の」(urbanus)と修飾されているだけでなく、田舎のネズミの歓待に満足せず、

tandem urbanus ad hunc "quid te iuvat" inquit, "amice, 90
praerupti nemoris patientem vivere dorso?
vis tu homines urbemque feris praeponere silvis?

(ついに都会のネズミが言うには、「友よ、不便な森の中で我慢しながら暮らすのが君には良いのか。君は野蛮な森から人間が住む都会を選びたくはないのか。)」

(『諷刺詩』第二巻6番90-92)

と言っている。しかも彼らは、

ambo propositum peragunt iter, urbis aventes
moenia nocturni subrepere.

(二人は所定の道を進んだ、夜間に町の城壁の下をくぐろうとして。)

同じく壁の下をくぐるのでも、バブリオスの場合は「家の壁」であるのに、ホラティウスははっきりと「町の城壁」と言っている。

イソップ寓話の歴史の中でホラティウスがどのような位置を持っているかに関しては、今回の考察の範囲を超えているが、少なくともホラティウスの語る二匹のネズミの物語は、「田舎と都会」の対比が中心的テーマであったと考えられる。

三. 結 論

セネカが『狂えるヘルクレス』の中で語った都市への否定的なイメージは、作者自身が都市の権力抗争を勝ち抜いた人であるだけに、どこまで真意を反映したものなのかは、制作時期がいつなのかと言う問題とも絡んで、容易に断定しがたい。しかし、作品の鑑賞を優先し、テキストを読解する限り、都市の喧騒よりも田園の平安を希求していたことには説得力があるように思われる。

一方ウェルギリウスの場合も、叙事詩の創作まで含め、そこに至る過程を考えると、都市よりも田園を重んじる姿勢には、いくつかの保留が想定される。田園に理想的な生活があった架空の黄金時代が実現不可能である以上、比喩として黄金時代の再来に例えられる可能性を持つ、アウグストゥスによる「ローマの平和」において、都市から発展したローマが世界を征服し、それによって実現したのが「ローマの平和」である以上、都市に付随する権力闘争や戦争を完全に否定することはできず、田園における平安もその中で考えねばならず、そこでは農民が勤勉に労働にはげむことによって、「ローマの平和」を実現した国家を支え、それを通じて、哲学者たちが探求した理想的平安ではないにしても、個々の農村生活者たちは平穏無事な暮らしを送ることができ、作者自身も権力者に所有を保証された田園で理想的な生活を送ることができるという考えが見られるように思える。

ホラティウスに関しては、イソップ寓話を援用しながら、現存する限りにおいて、最も近い時代のテキストと比べると、二匹のネズミの物語において、先行作品の影響があるかどうかはわからないが、「田舎と都市」の対比を鮮明にした。都市の持つ魅力を否定するわけではないが、「平安と恐怖」、「質素と贅沢」と言うこの作品全体や、他の作品にも見られる彼の視点からも補強される。

carpe viam, mihi crede, comes, terrestria quando
mortalis animas vivunt sortita neque ulla est
aut magno aut parvo leti fuga: quo, bone, circa, 95
dum licet, in rebus iucundis vive beatus,
vive memor, quam sis aevi brevis."

(私を信じて、この道の先にある果実を摘め、友よ。地上に生きる者は死すべき命の中で生きており、偉大な者も、卑小な者の死を免れることはできない。良き友よ、許される間は、楽しんで

幸せに生きるのだ、人生が短いと言うことを心に刻みながら。) (『諷刺詩』第二巻6番93-97)

と言って、都会のネズミは、田舎のネズミを町へといざない、田舎のネズミも一旦はこの従順に従う。この箇所を読んだ時、ホラティウスの読者は次の有名な作品の一部を思い起こすだろう。

sapias, vina liques et spatio brevi

spem longam reseces. dum loquimur, fugerit invida

aetas: carpe diem quam minimum credula postero.

(賢く生きよ、ワインを濾すのだ。人生は短いだから、大きな希望は抱くな。こう言っている間にも、容赦なく時は去って行く。今日の果実を摘め、先のことなどは信じるに足らぬ。(『抒情詩集』一卷11番6-7)

占いに夢中な若い女性に対して、そんなことは無駄だから、「今を楽しもう」と言っている享楽主義的な抒情詩は、「今日の果実を摘め」(carpe diem)と言う詩句が有名だが、それとほぼ同じ表現で「この道の先にある果実を摘め」(carpe viam)と都会のネズミに言わせている⁽²⁶⁾。この場面では単に「さあ、一緒に行こう」と言っているに過ぎないとしても、享楽主義のモットーを連想させる措辞によって、底なしの享楽主義、あるいは不安と恐怖に震える都会の生活への否定的ヴィジョンを示している。

『諷刺詩』第二巻6番が、自分がようやく得た都市を離れた田園生活以上のことは決して望まないと言う祈願から始まっていることを踏まえても、ホラティウスが自分が都市生活の中で書記の職責、有力者の庇護下にある立場を忘れて、田園に暮らす喜びの表現を、つつましい形で敷衍したのが、「田舎のネズミと都会のネズミ」の話であったと言えよう。

ウェルギリウスの田園生活の称揚が、哲学智による最終的な理想を描いて、現実を踏まえた農耕生活が国家を支え、それが「ローマの平和」を実現させた要素の一つで、そこには自信の幸福をかみしめながらも、公的な視点を忘れない詩人の思想が見え隠れしている。それに比べれば、ホラティウスの作品群においても哲学や道徳など大きな問題も垣間見えながら、個人の幸福、とりわけ彼自身の幸福が最大の問題であったとは言えないだろうか。

「ローマ文学における都市イメージ」と言う大きな問題に対して、小さな結論しか得られていないが、セネカ、ウェルギリウス、ホラティウスの作品の一端を通じて、「田舎の平安」と対比されると、否定的なイメージが浮き彫りになる側面もある「都市イメージ」についてより深く考察していくのは今後の課題として残さざるを得ない。

(注)

- (1) 宮城 (2022)、宮城 (2025b)
- (2) テクストは Zwielerlein (1986) に拠る。
- (3) Fitch (1987), 174, Boyle (2024), 348.
- (4) Fitch (1987), 180, Boyle (2024), 356-360.
- (5) ἔσσειται ἡμαρ ὄτ' ἄν ποτ' ὀλόγη ἴλιος ἱρή / καὶ Πριάμος καὶ λαὸς εὐμμελίω Πριάμοιο. Homerus, *Ilias* VI, 448-449.
カルタゴを滅ぼした小スキピオが、炎上する都の姿を見て、この句を口ずさんだと、歴史家のポリュビオスが報告している。Polybius, *Historiae*, 36. 22.
- (6) テクストは Mynors (1969) に拠る。
- (7) Vergilius, *Eclogae* IV. 4-10.
- (8) Thomas (1988) I-II, 254.
- (9) Fitch (1987), 174, Boyle (2024), 348.
- (10) Fitch (1987), 179-180. 山下太郎「ウエルギリウス『ゲオルギカ』: 文明国家ローマに生きる人間の課題」、『西洋古典論集』1988, 37-58。
- (11) Thomas (1988) I-II, 183.
- (12) Thomas (1988) I-II, 244-245. 山下、前掲論文。
- (13) nescio quid maius nascitur Iliade. Propertius, *Elegiae* II. 34. 66.
- (14) テクストは Wickham / Garrod (1901) に拠る。
- (15) Muecke (1993), 192-196.
- (16) 吉川 (2020)、68-69。
- (17) Perry (1965), 140-143.
- (18) Horatius, *Ars Poetica*, etc.
- (19) 中務 (1996)、163-185、吉川 (2020)、34-61。
- (20) Plato, *Phaedo*, 60B-61B.
- (21) 宮城 (2025a)、19。
- (22) Muecke (1993), 207.
- (23) 岩谷・西村 (1998)、Chambry (1969)、Perry (1965)、大塚 (1971) など。
- (24) Perry (1952), 465-466.
- (25) Ὁ μῦθος δηλοῖ ὅτι / τὸ λιπῶς διάγειν καὶ ζῆν ἀταράχως / ὑπὲρ τὸ τρυφᾶν ἐν φόβῳ μετ' ὀδύνης.
- (26) Muecke (1993), 209.

参考文献

(セネカ)

Zwielerlein (1986) : Otto Zwielerlein, ed., *L. Annaei Senecae Tragoediae*, Oxford at the Clarendon Press, 1986, Oxford Classical Texts

Fitch (1987) : John G. Fitch, ed., *Seneca's Hercules Furens*, Ithaca, New York: Cornell University Press, 1987

Fitch (2002-2004) : John G. Fitch, ed., *Lucius Annaeus Seneca*: Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2002, 2004, LCL 62 / 78

Boyle (2024) : A. J. Boyle, *Seneca Hercules*, Oxford U. P., 2023

(ウエルギリウス)

Austin, R. G. (1971), *P. Vergili Maronis Aeneidos Liber Primus*, Oxford at the Clarendon Press

Mynors, R. A. B. (1969), *Publi Vergil Maronis Opera*, Oxford University Press

Thomas, Richard F. (1988), *Virgil Georgics I-II / III-IV*, Cambridge University Press

岡道男／高橋宏幸 (2001)、『ウエルギリウス アエネーイス』、京都大学学術出版会

小川正廣 (2004)、『ウエルギリウス 牧歌／農耕詩』、京都大学学術出版会

(ホラティウス)

Wickham, Edwards C. / Garrod, W. H. (1901). Q. Horati Flacci Opera, Oxford University Press

Muecke, Frances (1993), Horace Satires II, Warminster, Wiltshire: Aris & Phillips

鈴木一郎 (2001)、『ホラティウス全集』、玉川大学出版部、2001

(イソップ)

一. アウイアヌス

Duff, J. W. & A. M. (1935), The Fables of Avianus, in Minor Latin Poets, London: Heinemann, Loeb Collection

Ellis, R. (1887), The Fables of Avianus, Oxford at the Clarendon Press

Gaide, Françoise (1980), Aiaanus Fables, Paris: Société d'Édition «LES BELLES LETTRES»

Herrmann, Léon (1968), Avianus Œuvre, Bruxelles: Latomus, Revue d'Études Latines, Collection Latomus XLVI

二. パエドルスとバブリオス

Breno, Alice (1924), Phèdre Fables, Paris: Société d'Édition «LES BELLES LETTRES»

Herrmann, Léon (1950), Phèdre et Ses Fables, Leiden: E. J. Brill

Perry, Ben Edwin (1965), Babrius and Phaedrus, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, Loeb Collection

Rückert, Friedrich Fr. und Schönberger (1975), Phaedrus Liber Fabularum, Stuttgart: Philipp Reclam

Solimano, Giannina (1996), Fedro Favole, Milano: Garzanti

岩谷智・西村賀子 (1998)、『イソップ風寓話集 パエドルス／バブリオス』国文社

三. イソップ寓話

宮城徳也 (2025a)、「アウイアヌス『イソップ寓話詩集』の独創性と意義—「犬とライオン」, 「北風と太陽」, 「アリとセミ」からの考察—、『比較文学年誌』早稲田大学比較文学研究室、1-24。

Chambry, Émile (1969), Ésope, Paris: Société d'Édition «LES BELLES LETTRES»

Perry, Ben Edwin (1952), Aesopica: A Series of Texts Relating to Aesop or Ascribed to Him, Urbana and Chicago: University of Illinois Press

大塚光信 (1971)、『キリシタン版 エソポ物語 付古活字本伊曾保物語』角川書店

中務哲郎 (1999)、『イソップ寓話集』岩波書店

山本光雄 (1974)、『イソップ寓話集』(改版) 岩波書店

ウェブページ: Aesopica: Aesop's Fables in English, Greek and Latin

<http://mythfolklore.net/aesopica/index.htm>

四. その他

Hervieux, Léopold (1894), Les Fabulistes Latins depuis le Siècle d'Auguste jusqu'à la Fin du Moyen Âge: Aianus et Ses Anciens Imitateurs, Paris: Libraire de Filmin-Didot

De Paulis, Guido (1997), Aviani Index et Lexicon, Hildesheim: Olms-Weidmann

小堀桂一郎 (2001)、『イソップ寓話 その伝承と変容』講談社 (中央公論社、1978)

中務哲郎 (1996)、『イソップ寓話の世界』筑摩書房

吉川斉 (2020)『「イソップ寓話」の形成と展開 古代ギリシアから近代日本へ』知泉書館

(都市)

宮城徳也 (2022)、「古典古代の疫病と都市—文学作品における描写」、坂上桂子 (編)『危機の時代からみた都市—歴史・美術・構想』水声社、227-250

宮城徳也 (2025b)、「古典古代の文学作品に見られる都市描写—ホメロスの場合」、坂上桂子 (編)『都市のコラージュ—美術・生活・歴史』水声社、249-275